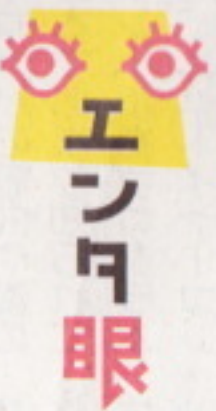


もつと気楽に素浄瑠璃



古典は洋楽だ！ 歌詞を理解しなくていい音楽としてまず楽しめるかどうか。日本語に違いはないのだから、分かりたくなくても結局分かっってしまうところがある。それぐらいで十分、飽きたら寝ればいいのだ。常々そう思っているアホな記者が笑ける素浄瑠璃に出会った。大阪・御霊神社の儀式殿で6月16日に開かれた「義太夫と落語の会」で聴いた「入間詞長者気質―持余屋の段―」である。

舞台上上がったのは、豊竹英大夫と鶴澤清介。例によって全部分かったわけでもなん



豊竹英大夫(左)と鶴澤清介

でもないが、自然とおかしみがこみ上げた。分厚い床本を頂いて威厳みなぎる英大夫が語り出したのは「持余屋長者兵衛」なる旦那の店の暮らしぶりのよう。もうかってもらってしゃあないのか、金を使ってくれねば困るとばかりに、丁稚でも芝居を見ては茶屋にも行ける。金の置きどころをつくるために年中穴蔵を掘っていて、町中の家を買って、一体どこの世界やねん！

大阪の「始末」とは正反対の価値観。ふと、三途の川で「はまったら生きるぞ！」と注意される上方落語「地獄八景亡者戯」を思い出した。「常識」を揺るがす滑稽な物語を真顔で語り続ける姿に、なおさらの面白みが宿るように思えてくる。いく度の笑いを重ねれど、こちらも至って真面目な顔で奏でる清介の太棹三味線の音色に古典の揺るぎなき風格を感じとれた。

かつて、宴席で主に披露された「おどけ浄瑠璃」と呼ばれるジャンルという。落語作家の小佐田定雄らが加わった「義太落トーク」によれば、文楽華やかかなりしころは、おもしろい演目もたくさんあったらしい。先に出演した笑福亭生喬の「豊竹屋」をはじめ、上方落語にも義太夫の出でくる面白いネタは残る。知れば知るほど、演芸との相性の良さを感じる素浄瑠璃。もつとあちこちで、気楽に聴いたらありがたい。

(篠塚健一)